

豊日別宮古文書と古代豊国のキングメーカーの研究 (2)

著者	橋本 昭雄
雑誌名	九州国際大学教養研究
巻	24
号	1
ページ	1-33
発行年	2017-07-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000646/

豊日別宮古文書と古代豊国の キングメーカーの研究（２）

橋 本 昭 雄

検証・香春の地名の由来

豊日別宮古文書に書かれているテーマの中心は、この神社の活動報告である。最も世に知られた活動は、日本で最初に開催されたと言われる宇佐放生会の開催で、宇佐宮、豊日別宮、それに宇佐宮の御神体となる宝鏡（銅製）を鑄造する、鍛冶技術を継承する長光氏との共同開催である。古文書には、放生会が720年から記録されている。前報で報告した通り、銅鏡を鑄造する長光氏は、田川郡の採銅所村（旧杉阪村）に居住していた〔 0 〕

そこで、香春岳での銅の採掘と精錬は元より、古代から銅鏡の製造を継続してきた長光氏とそれを取り巻く地域の様々な環境について、①採銅所を中心にした銅の採掘、精錬、銅鏡の鑄造技術は何処から由来、②その技術をもたらした集団（国家）及び人材、③技術者の教育・移転のシステム等興味が湧いて来た。まず手始めに、“かわら”の地名が初出する豊前國風土記（逸文）について再検証し、加えて、前報で報告した豊日別宮古文書の内容を他の文献でも確認できるかどうか調査・研究した。

1、史料の再検討

香春の地名の由来について、宇佐宮託宣集に豊前國風土記の逸文が残されており、以下の様に記述されている。

- (S1) 豊前國風土記曰 田河郡 鹿春郷在郡東北 此郷之中有河 年魚在之
(S2) 其源從郡東北杉坂山出 直指正西流下 湊會眞漏川焉
(S3) 此河瀬清淨 因號清河原村 今謂鹿春郷訛也
(S4) 昔者 新羅國神 自度到來 住此河原 便即 名曰鹿春神
(S5) 又 郷北有峯 頂有沼周卅六歩許 黃楊樹生 兼有龍骨
(S6) 第二峯有銅并黃楊龍骨等
(S7) 第三峯有龍骨。



写真1 香春神社の石碑、[S4]の碑文

- (T1) 豊前國風土記曰く、田河ノ郡、河原の郷郡の東北にあり、此の郷の中に河あり、鮎あり。
(T2) その源は、郡の東北のかた、杉坂山より出でて、直ぐに、正しく西を指して流れ下りて、眞漏川につどい会えり。
(T3) この河の瀬、清し。因りて清河原の村となづけき。今、鹿春の郷というは、よこなまれるなり。
(T4) 昔、新羅の國の神、自ら渡り来たりて、この河原に住みき。即ち、名づけて鹿春の神という。
(T4') 「昔の者、新羅国神(王)なり、子道として親孝行するため自ら渡り歸り来たる。昔氏は、原(始め)より、此に住む黄家の血筋なり。黄家は、即

位を便(治)める、名付けて曰く、鹿春の神と。

(T5) 又、郷の北に峯あり。頂きに沼あり。めぐり三十六歩ばかりなり。黄楊(つげ)の樹生い、また、龍骨あり。

(T5') 又、郷北に峯有。頂に沼有、周囲卅六歩、許黄楊樹生(うま)る、兼龍骨有。

(T6) 第二峯には、銅ならびに黄楊・龍骨などあり。

(T7) 第三峯には龍骨有り。



写真2 採銅所から金辺峠を望む

1 1 鮎の住む川

T1とT2の内容から 豊前国風土記逸文に出てくる杉坂山から流れ、鮎の住む川は、現在、金辺川(清瀬川)と言う名前である(写真2)。杉坂山は、現在、どの山を指すのか不明だが、採銅所村の旧名は杉阪(坂)村であった。逸文に書いてある、香春町から東北の方角は、企救郡小倉との郡の境界の山地に当たり、金辺峠付近になる。金辺は、日音で kibe と読む。日音では、b と m が良く音韻変化し、寒いは、sabui とも samui とも発音する。美は、bi とも mi とも発音する。従って、金辺は、kibe とも kime とも発音が可能である。別解として、金を韓音で kim、辺を日音で he と混合読みして合わせると kimhe

と読み、金海の韓音、kimhe と一致する。金辺周辺の山地を水源とし香春郡内を流れ金辺川の名前は、金海と同音異字で、これは、金首露が建国した駕洛国の首都の都市名である。



写真3 金辺（清瀬）川

1 2 眞漏川について

T2行に出てくる眞漏川について考察する。現在、香春郡内を流れる川は、山間部の上流から金辺川が町内を流下し、下流の田川市内で彦山川に合流し、直方市内で本流の遠賀川に合流の後、約20km 流れて玄海灘に注ぐ。その西方は、直線距離65km で、朝鮮半島の釜山、嘗ての駕洛国の首都、金海付近に到る。

当地に、歴史的に見ても、眞漏川に該当する川は見当たらない。この川の名前、眞漏は、日音で shinlou、韓音では、shinlu と表記する。韓音の場合 n と l が隣り合う場合、l の前にある n が同化する音韻ルールがある。例えば、新羅 sinla の場合、silla と発音される。従って、眞漏 shinlu の場合 shillu と発音される。同様に日音読みの shinlou 眞漏にも韓音ルールを当てはめて読むと shil-lou shillo と読むことができる。眞漏を shillo と読めば、①で検討した駕洛国を建国した首露（日音：shulo、韓音：sulo）の名前と近似音になる。従って、

眞漏川の川は、首露の皇統（血統）を示唆するものと考えられる。

1 3 首露王と関係する地名の例

北九州地域で、首露王と関係があると思われる地名の例を紹介しておきたい。

北九州市門司区にある戸上神社の名前の由来について、当神社が昭和16年（1931年）に発行した懸社戸上神社誌に次のように書かれてある。

「当社は戸上神社と称す。明治維新前には、戸上山満隆寺を当社の別当として奉社せる時代ありて、戸上権現と称し奉れり。戸上（とのへ）の御名称については、戸上権現の縁起によれば、山上へ御鎮座の際、枝折戸の上に奉戴し遷座し奉りしより、山を戸上山と号し、神社を戸上神社と称し奉ると伝ふ。」

また、同誌の別の箇所ではその由緒について以下のような記述がある。

「当社の御創立に就いては、旧別当満隆寺に於いて傳へたる縁起書の記載に拠れば、宇多天皇の御宇、寛平年中（紀元1550年頃、昭和16年より約1100年以前）鎮西の霊峰たる当山即ち戸上山上に三柱の大神を奉祀せしに始まると傳ふ。奉祀の際、御霊代（みたましろ）を枝折戸（しおりど）に奉戴して、現戸上山頂に奉安しまいらせしより、山を戸上と号するに至れりといふ。」

これらの記述から戸上神社の創立が、昭和16年（1931年）からさかのぼること1100年前の831年であることが分かる。

「御霊代」、「枝折戸」とは何であろうか。広辞苑によると、御霊代（みたましろ）の霊代（たましろ）は、「神・人の霊の代りとして祭るもの。れいだい。」、また、「枝折（しおり）」は、広辞苑によると、「山道などで木の枝を折りかけて帰りの道しるべとすること」、「枝折戸」については、「竹または木の枝を折りかけてつくった、簡単な押し開き戸、柴折戸とも書く。」と書いてある。

広辞苑の助けを借りて上記の縁起を読み解くと、「西暦831年に神・人の霊の代りとして祭るもの『御霊代（みたましろ）』を竹または木の枝を折りかけて作った、簡単な押し開き戸『枝折戸』に乗せて山の上にお祭りした。」となる。言い換えれば、御霊代を戸の上に載せて運んだということである。

戸上(とのへ)を解く上で重要なヒントは、戸上山の直ぐ近く、南西3km位置する馬寄「まいそ」である。馬寄は、10世紀に出版された「延喜式」に拠ると「古代の駅」で「駅馬」を止めた場所である。李氏朝鮮時代では、これを「馬位所」と書いて mawiso と読んでいた。また、韓音の「ma wi so」は、「馬と牛」の意味でもある。古代の駅には、馬車も牛車も寄せたのである。因みに、韓音の uma は牛馬と書く。馬寄を maiso (馬と牛)と読む理由は、馬が日音の「うま」ではなく韓音の uma 即ち牛馬のことであることを、地域の記憶として伝承していると筆者は解釈している。

そこで、これをヒントに、その必然性と理由を「御霊代」と「枝折戸」という2つのキーワードから考えてみよう。手始めに「枝折戸」という漢字を韓音で解明して見よう。

枝は kaji、ji または yuksoni、ki と読む。kaji は木の枝の意味である。一方、yuksoni の yuk は六、soni は手の指のことであるから、yuksoni は六指、即ち、「六本指の人」の意味になる。ところが、手指のことを sonkarak または、karak と言う。karak は駕洛と同じ発音である。sonkarak の son に手を当て、karak をそのまま読めば、tekarak は大加羅(伽耶)の韓音と酷似音である。駕洛(加羅、伽耶)は朝鮮半島南部に栄えた古代国家、伽耶六国のひとつで首露王が建国した。金官伽耶とも言う。

「折」は、jeol (ㄹ)と読んで「平安」、je と読んで「明るい、輝く」の意味があり、「絶」と同音異字である。戸は ho と読む。また、戸は jige (しよいこ、担ぐこと) churibku (出入り口)、jib (家)、kumeong (穴)、saram (人間)、makda (くい止める、防ぐ、守る)、jukwanhada (主管する)の意味がある。このうち makda (くい止める、防ぐ、守る)や jib (家)、saram (人)、jukwanhada (主管する)を使って文を作ると次のようになる。

「枝折戸」は、yuksoni jeol eul makda . 「六伽耶(加羅、駕洛)の絶滅を防ぐ」、あるいは、yuksoni je jib . 「六伽耶(加羅、駕洛)の輝く家(国)」、または yuksoni je saram . 「六伽耶(加羅、駕洛)の輝く人」の意味となる。また、yuksoni

eul jeolhan jukwanhada で「六伽耶(加羅、駕洛)を平安に主管する。」となる。

上記、戸上神社の縁起によると「奉祀の際、御霊代(みたましろ)を枝折戸(しおりど)に奉戴して」とあるので、枝折戸の上に御霊代を乗せると「御霊代枝折戸」なる漢文が得られる。これを韓音の読み下し文にすると「代 wi 御霊 i 六伽耶(加羅、駕洛) eul 平安 han jukwanhada」即ち、「代の御霊が六伽耶を平安に主管する。」となる。

この様に読み解いてくると、「六伽耶(加羅、駕洛)の輝く人」とは、首露王のことであることが判る。従って「御霊代(みたましろ)」の「しろ」は「首露(日音でシュロ、韓音でスロ)」を表現することになる。即ち、「御霊代(みたましろ)」とは「首露王の御霊」でなくてはならないとの結論になる。

1 4 香春岳の黄楊

眞漏が、首露王を意味するとすれば、王妃との関係を調べる必要がある。王妃の名前は許黄玉(Heo Hwang-ok)と言い、阿踰陀国(インドのサータヴァーハナ朝)の王女であると名乗っている。逸文の T1 行に香春郡内を流れる川について「此の郷の中に河あり、年魚(鮎)あり。」と記述があり、王妃がアユダ国の出身であることを強く示唆している。又、T5、T6、T7 行に銅並びに黄楊・龍骨が産することが明示されている。黄楊(ツゲ)は、印鑑、櫛、ブローチ、装身具、将棋やチェスの駒、家具指物等の工芸品や美術品の原料となる柘植木のことであり、中国ではツゲ一般を黄楊と書くが、厳密には、タイワンアサマツゲ *Buxussinica* 又は、*Buxus microphylla subsp.sinica* を意味し、南西諸島から中国、台湾に分布する。日本のツゲを特に指す場合は「小葉黄楊」と書く。暗に、亜熱帯気候と関係する物や人を示唆するものであろうか？ また、T5 の原文 S5 をみると「又郷北有峯頂有沼周卅六歩許黄楊樹生兼有龍骨」と書かれており、首露王の後「許黄玉」の「許黄」が含まれている。許黄楊は、韓音では heo hwang yang で、許黄嬢と同音異字である。嬢は、現在では、娘の意味で使われているが、元々の意味は母である。従って、許黄嬢は、許黄(玉)

1 5 香春岳の龍骨の意味

- 8 -



図2、魚と龍で合成した魚龍

攻撃を防ぐために堀を掘ったりして、守りを固めた大規模な構造物、砦等の大きな物を表すようになり、ここを守る兵員を防人といい、埼守の意味である。そのため、城は、崎を守る所の意味となり、龍にナガ(長)を当て、崎と合わせて、龍城=長崎としたと伝えられている[1]。因みに、確認のために English hindi dictionary の SHABDKOSH で、Dragon を引いて見ると、pankhabala naga がヒットした。マレー語、インドネシア語では、龍(dragon)は naga である。これは、東南アジア地域が古代において、ヒンズー教の影響下にあったという歴史的事実によるものであろう。骨を含む用法として、骨族の表現が日本書紀下巻に「前に調進(みつぎたてまつ)れる使麻那は、百済国の主の骨族に非ず」と出ているので、龍骨は、龍城国の王家の骨族(血統)の意味もある[2]。また、新羅では、王族の身分を、聖骨、新骨の表現で表す。

1 6 辛国息長大姫大目命

黄玉王妃が、インド・阿踰陀国の出身ということであれば、その人種的な特徴が当然あってしかるべきである。香春岳、南の一ノ岳に祀られていた辛国息長大姫大目命(からくにおきながおおひめのおおめのみこと)の名前について、息長大姫の「大」は、日音では「だい」或いは「おお」であるが、韓音では de で、「帯」と同音異字である。従って、息長大姫を息長帯姫と書き換えることができ、古事記の息長帯比売命(おきながたらしひめのみこと)の名前と一致する。

注目したいのは、名前の最後に記述されている「大目命」である。インド系の女性の化粧法で印象に残るのは、我々東アジア系の黄色人種とは異なる、褐色の肌と大きな魅力的な目、豊満な体形が印象的である。李鍾瑞著の「駕洛国の栄光②許王后、海より来る」によると、著者が取材でアヨーディア市を訪問の後、ボンベイで講演した折に、講演を視聴した当地の画家が、インド側から見たイメージを描いた、「黄玉王妃・上陸図(図3)」が当地の新聞 The Times of India の週刊誌、ダルマ・ユガに掲載されている。このイメージ図から受ける印象は、正に、大きな目をした非常に魅力的な「駕洛国息長大姫大目命」の名前ぴったりの姿である[1]

1 7 自ら渡り来た「新羅の神」

(1) 逸文によると、原漢文(S4)「昔者 新羅國神 自度到來 住此河原 便即 名曰鹿春神」を(T4)「昔、新羅の國の神、自ら渡り来たりて、この河原に住みき。すなわち、名づけて鹿春の神という。」と、読み下しているが、



図3、ダルマ・ユガに掲載され「黄玉王妃・上陸」イメージ図

何故、新羅の國の神が、自ら渡って来たのだろうか？不思議な文章である。原漢文(S4)は、(T4')の様にも読める。昔を「むかし」と読まずに「昔氏」と読む。

昔(鵲)氏は、新羅の国王4代の昔脱解王が初代の昔氏系新羅王である。彼は、倭人との説がある[7]。自度と子道は、韓音ではjadoで同音異字である。子道とは、「子の道として父母に仕える」ことである。言うことは、jadoは、同音異字の「自度と子道」を同時に使用可能にした用語の選択で、新羅の國の神が、自ら渡って来た理由をも説明していることになる。「住此河原」に於いて、「原」は、もと、みなもと(源)、はじめ、起こり(起源)の意味で、「河」は、元々、これ一字で「黄河」のことであつたと漢和辞典にある。河原で河の源流を、河口は海への出口を意味する。「住此河原」をそのまま読み下せば、「この河の原流に住む」であるが、別解として、「ここに住む原(元々)黄の血統(河)なり」と読み下せる。筆者は、河は血筋の意味も加えて、「黄河」は首露王の後、黄玉王妃の血筋を示していると考え、「新羅國の神(王)は、黄玉王妃の血統で鹿春が出身地(原住民)である。」となる。筆者は、河は血筋の意味も加えて、「黄河」は首露王の後、黄玉妃の血筋を示していると考え、「新羅國の神(王)は、黄玉妃の血統で鹿春が出身地(原住民)である。」となる。元々その地域に住んでいる人たちを英語では、nativeと表現する。nativeを辞書的には、原住民と翻訳するが、筆者の好みではない。例えば、native Englishという表現があり、これは、現地の英語、本物の英語という意味である。

次の「便即」は、便も即も共に「すなわち」と読めるが、これまで、このことを指摘し考慮した文献はないので、重複して使用している理由を研究した。「便」は、漢和辞典(旺文社)では、「領土を区分する、治める」、漢韓大辞典(東亜出版社)では、「慣れている、巧だ、区分する、仕分けする」などが掲載されている。

一方、「即」は、日音、韓音共に「地位に着く」の意味で「即位する」が例示されている。従って、「便即」を直訳すると、日音では、「即位を治める」、

韓音では、「即位が巧だ」や「即位を仕分けする」が可能な訳となるが、意識して、「即位を司る」とすれば、日本語らしくはなる。最後のフレーズ「便即名曰鹿春神」は、「即位を司る、名付けて曰く鹿春神なり」となる。別解として、「便」を解字法で「更と人」に分解し、「人を更(かえて)即(地位)におく」の意味に採ることもできる。(T4)によれば、「鹿春の神」は、「新羅の國の神」ということになるが、南の一ノ岳に祀られていた辛国息長大姫大目命(からくにおきながおひめのおおめのみこと)は、辛国と書かれてあり、これは駕洛国の意味であり、新羅の出身ではない。以上、(T4')を纏めると、「昔氏は、新羅國王なり、子道として父母に仕えるために自ら渡り帰り来たる。王は、厖(始め)より此に住む、黄家の血筋なり。黄家は即位を司る、名付けて曰く、鹿春の神と」。ここで、鹿とは帝位のことで、春の「わら」に「和羅=和の絹を着た皇族」を当てると「鹿和羅」となり、「鹿春」の本当の意味を明らかにしている。昔氏は、歴代56代の新羅王の内、4代、9代、10代、11代、12代、14代、15代、及び16代の合計8人の王を輩出している。従って、新羅の神が自らわざわざ香春に来て住んだのではなく、香春出身の昔氏が新羅の王となって、自ら帰郷して親孝行をした事を述べている。因みに、初代の昔脱解 sokdalhe は、新羅の古文書、三国史記では、倭人と書かれている[7]

(2) 上記、126文字の短い逸文中に3回も、龍骨の記述が強調されている。我が国に古代より語り伝えられている倭の龍の代表は、記紀に記述されている八岐大蛇である。

古事記では、須佐之男命は、出雲の国、肥の河上、鳥髪で、櫛名田比売との結婚を条件に、八咫遠呂智退治を請け負った[3]。まず、須佐之男命は櫛名田比売を櫛に変えてしまい、自分の髪に挿した。古事記では、須佐之男命の八咫遠呂智退治時に、櫛名田比売を櫛に変える話がセットになっている。日本書紀でも、第八段一書(二)では安藝國と第八段一書(三)では出雲國で、素戔鳴尊は八岐大蛇退治の代償として、奇稻田媛(クシナダヒメ)を娶る話になっており、ここでも、素戔鳴尊、八岐大蛇退治、奇稻田媛がセットになっており、

クシ「櫛」がキーワードである[4][5]

古代から、櫛の原料として利用されたのは、黄楊(つげ)である。この神話のヤマタノオロチは、明らかに龍である。豊前風土記逸文に書かれている主題、刀鍛冶集団・長光(龍光) 黄楊、龍骨が記紀のヤマタノオロチ退治の話の中に網羅されていることを確認した。

一方、九州・英彦山に伝え残されている書『彦山流記』(彦山権現垂迹縁起抜書)には、阿蘇山、宝池の九頭龍神(九頭八面大龍)の話が記載されている[6] 肥後国阿蘇峰で修行中の修行僧・臥駿が龍神の試み受け、耐え切れずに罪を犯し、舌を切られるが、改心して、元通りの舌に戻され、「臥駿は心から歓喜踊躍し礼の意を表して、その場を去った。九頭の龍から若い女性、そして天空からの声として現れた此の大龍者こそ、法華經に説かれている同聞衆、娑伽羅龍王、阿那婆達多羅龍王第三王子である。「是すなわち十一面觀音の化身である。」と結ばれている。最後に出てくる、娑伽羅龍王と阿那婆達多羅龍王の名前の中に「伽羅」と「多羅」が含まれており、何れも任那加羅六國の名前と「龍王」がドッキングして同時に使用されていることも特筆すべきことである。

新羅第4代の王、昔脱解 sokdalhe は、新羅の古文書、三国史記では、多婆那国 tabanakoku の出身と書かれている[7] 日音、韓音ともに、b と m は交換するので、tabana は tamana (玉名)に容易に変化する。又、三国遺事には、龍城国と書いてあり、これを「たつしろ国」と読めば、「八代国」の「やつしろ国」と紛らわしい国名になり、多婆那国(玉名国)と共に、現在の熊本県内の都市名である。上記の阿蘇山の宝池の九頭龍神(九頭八面大龍)の伝説が文字で残されているのが確認でき、三国史記と三国遺事の表現は、同じ内容を記述していることを発見した[8]

記紀のヤマタノオロチの表現は、八頭の頭と尾を持った龍であり、阿蘇山の宝池の九頭龍神は、九頭八面の大龍であり、倭の龍は、八の数がキーワードであることを示している。龍城国を阿蘇山の九頭八面の大龍とヤマタノオロチの

八を使って、熊本地方の龍は「八龍」の意味であり、従って、八龍城(やたつしろ)国を短縮して、八城国と書けば、「やつしろ國」が誕生する。

昔脱解の出身国と言われる、三国遺事の龍城国について、本文の注記によると、正明国・琺夏国ともいい、倭の東北一千里にある国と書かれている。3世紀に書かれた魏志倭人伝の一里は、短里で78mである。従って、これで計算すると一千里は、78km程度となり、九州内の地域と考えられる。

古代の新羅では解字法という漢字を偏と旁に分解して用いる漢字遊びがあったことが知られている。

例えば、「妙」を右から左に分解して「少女」と表せば、全く違う漢字として暗号化できる。例えば、天智天皇が関わった663年に行われた倭国・百済連合軍と唐・新羅連合軍の戦いの戦場が白村江の戦いがあった。この白村江を広辞苑では、「はくすきのえ」と読み、「すき」は古代朝鮮語と注がある。しかし、白村江を解字法で、白寸木江と分解すれば、日音で容易に「はくすきのえ」と読める。これは、本当に古代朝鮮語であろうか[9]?

「正明国」を解字法で「正月日国」と分解して、正を「ただし」の「た」と読めば、「たつきひ国」が誕生する。「たつ」に「龍」を、「き」に「水城」の「城」を、「ひ」に「火」を当てると、「たつきひこく」は、「龍城火国」となる。「火の国」とは、現在の佐賀県、雲仙普賢岳の長崎県及び阿蘇山の熊本県を含む地方行政区分の西海道に属する令制以前の国名で、後に、肥国になり、分割されて、肥前と肥後になった[10]。

一方、琺夏国とは何のことであろうか。琺を解字法で、分解すると「完王」となる。「完」は、「屋根を巡らす」、「しっかり守る」、「治める」などの意味がある。「王」は、「天皇」を意味する。また、「夏」には、「大きな建物」の意味があるので全体として「天皇をしっかり守る巨大な建築物の国」ということになる。

「龍城」の漢字表現は、皇帝が治める巨大な建築物(城)の意味であろうから、「琺夏」の意味と同じということである。従って、三国遺事の記述は、「龍

城国」＝「正明国」＝「琬夏国」であることが確認できた。また、三国史記の「龍城国」や「多婆那国」は、火(肥)國・熊本の地域名「玉名」を示唆しており、既述の通り、「龍城国」を「たつしろ国」と読めば「やつしろ国」を示唆していると感じる。三国遺事の「正明国」が、上述の様に「龍城火国」と成るので、これも明らかに、火(肥)国という地域名を盛り込んだ表記法で、三国史記と三国遺事の表現が一致していることが確認できた。新羅の第4代国王、昔脱解は、火国の出身の和人ということになる。また、昔の姓は、鵠(かさぎ)から採った命名と伝えられていることから、鵠が生息する九州の出身でると考えたいが、鵠は、朝鮮半島に多く、火国の地域、佐賀県などでは、現在確かに、鵠が生息しているが、半島から人為的に移入された信じられており、昔脱解の在位期間(AD57-80年)以前の時代に、火の国、現在の佐賀、長崎及び熊本地域などに鵠がいたという歴史的記録は確認されていないので、事実なら、古代の我が国にも鵠が生息していたことを示唆する初めての記事ということになる。ただ、朝鮮半島の鵠と佐賀の鵠のDNA型が一致しないと言われていたので、移入説も今の所、確かとは言えない様だ。

また、熊本地方には、倭武尊による熊襲退治の神話がある。「熊曾」の「熊」は、一般的には、動物の「熊」であるが、漢韓大辞典で検索して見ると、韓音で sebar jara がヒットした。Sebar は子供の意味、jara はスッポンで、合わせて「子供のスッポン」の意味になる。金官駕羅國の金首露王が降誕した釜山近郊の金海市の亀旨峰を、地域の住民は、jarapong チャラポン(スッポン峰)と呼んでいた。金首露王は銅神と崇められ、金官駕羅國では「神」は、首露王の生誕神話で「亀」が登場するので亀である。従って、銅亀(銅神)は、スッポンの事である。

従って、熊襲退治の熊は、「子供のスッポン」であるということになり、首露王の子供を意味することになる。

1 8 新羅王朝に生き続ける首露王の血統

歴史的には、金首露の駕洛国は562年に新羅に併呑され消滅したが、新羅第30代の文武王が、龍朔元年(661)に「伽耶国の元君(首露王)の九代孫の仇衡王が、我が国(新羅)に降った時、率いてきたところの世宗の子の率友公の子、庶云匝干の娘の文明皇后が朕を生んだので、首露王は、朕の15代の始祖であられる。そのしろしめした国は敗れても、その葬られし廟は今もなお存するから宗廟に合祠して祭りを続けん。」と令を下している。これで分かるように、駕洛国を滅亡させた新羅王の末裔・文武王が「首露王は、15代前の始祖であられる。」と述べて、首露王の宗廟に合祠して、以後、祭りを継続した[11]

実は、駕洛国は、滅亡したがそれ以前に、政略的に新羅と姻戚関係を結んでおり、首露王の血統は脈々と生き続けていたことが上記の記述から判る。

1 9 許黄玉王妃、インド阿踰陀国渡来の証拠

許黄玉王妃は、インドの阿踰陀国の出身と自ら名乗っており、これを実証するために、2004年に、ソウル大学医学部の徐廷ソン教授と翰林大学医学部のキム・ジョンイル教授は、韓国遺伝体学会で、「許氏の子孫と推定される金海にある古墳の遺骨を分析した結果、韓民族のルーツであるモンゴル北方系とは異なり、インド南方系だった」と報告している[12]。黄玉王妃の子孫の遺骨のDNA分析結果は、王妃がインドの阿踰陀国の出身の決定的な証拠になる。しかしながら、阿踰陀国と龍城国の関係が今一はっきりしない。黄玉王妃が嫁入りするときに龍城国(長崎)を経由して、駕洛国の首露王のもとに到着したことは事実であるが、あくまで、そこは、経由地であるとされている。

前出の李鍾瑋氏は、船の乗船時間、帆船の航海で二か月前後から考慮して、黄玉王妃は、出身地の阿踰陀国の本国からでは遠すぎて、時間が掛かり過ぎるので、中国大陸の福州にあった“分国”から駕洛国へ向かったのではないかと結論に達している。筆者は、旧駕洛国の黄玉王妃の関係遺跡の中に、螭首(チシュ：角のない)の双竜の礎石や魚龍の絵や龍に守られた航海の様子等、中国



図4、許黄玉后宮（蓮華寺）に残る螭首（角のない）の双竜

大陸の雲竜とは全く異なるデザインの特徴ある龍に関連する遺物が多いので、倭国の龍城国育ちの阿踰陀国人ではないかとの印象を受けている。

王妃の嫁入り道具だけは、直接船に積んで、彼女の両親の母国であるインドの阿踰陀国から遙々倭国の龍城国（長崎）まで婚礼に間に合うように時間を掛けて運び、当地育ちの黄玉姫は、龍城国で乗船して駕洛国を目指したとすれば、黄玉姫の嫁入りの謎は大部分が解ける。豊前国風土記逸文のS6が第二峯、S7が第三峯のことを記述していることから、S5は第一峯のことを書いているので、第一峯の祭神は、息長大姫大目命である。韓音では、「大」を de と読み、「帯」と同音異字であるから、息長大姫を息長帯姫と書ける。息長帯姫 = おきながたらしひめ = 気長帯姫 = 気長大姫に関連する漢字をS5の中から選ぶと、許、黄、楊、樹、龍である。この漢字を使用して、気長大姫を表現すると気 = 黄 = 樹 = き、長 = naga = 龍、大 = お = 黄、姫 = 若い娘さん = 嬢 = yang = 楊であるから「黄龍黄黄嬢」となる。また、「大」の代わりに「帯」では、韓音で腰に巻く長い帯を heori ddi であり、heo の音は、「許」と同音である。息長大姫も同様に、黄黄龍黄黄嬢（おきながおおひめ）で表記可能である。前出した、龍城国も龍嬢国と同音である。従って、息長大姫大目命は、豊前国風土記逸文の記述からも、金官羅羅國の首露王妃、許黄玉妃のことではないかとの結

論に達した。

前述の様に、逸文 S5 は、「また、郷の北に峯あり、頂に沼あり、周囲36歩ばかりなり、黄楊の樹生え、かつ、龍骨あり。」が一般的な読み下し文である。

しかし、漢韓大辞典によると、沼は、韓音で jo と読め、「朝」と同音で、天子が政事を行う所、宮殿で、しかも、この沼は、峯の頂にあり、聖なる水を湛える神聖な器である。韓音では、水 = su = 首で、聖水 seong su は、聖首と同音異字で、首露王を指す。

また、沼は、「浅い泥土でも水草が繁茂する池」とある。韓音で水草は「sucho」、cho は、「初」と同音で、「sucho」は、「首初」と書け、初代の首露の意味に取れる。

漢韓大辞典に「卅六」の使用例がある。「卅六宮」と使い、「①漢代の宮殿の数、②広く、帝王の宮殿を言う言葉」の意味がある。「歩」は、「①歩幅、②面積の単位(一間四方)」が通常の用法であるが、③「神」の意味がある。「許」は、「許黄楊」で、許黄玉妃の名前の一部である。「卅六歩」=「卅六神」とすると、周は、「あまねく」であり、「広く知られる神」の意味になる。従って、「頂有沼周卅六歩」は、「頂に、広く知られる神聖な首の宮殿、有り」となる。以下、「許黄楊樹生兼有龍骨」は、楊 = yang = 嬢、樹 = su = 首であるから「許黄嬢と首が生る、かつ、龍骨あり」となる。水草、黄楊及び樹は、全て当地に自生しているので、両者は、「かわら」生まれで、S5、S6 及び S7 に記述があるように、至る所に、龍骨があり、龍城(嬢)国の一部、しかも、中心地であることを示唆している。

1 10 金属鍛冶・長光氏

採銅所村で720年以降継続された宇佐宮の御神体とすべき銅鏡の製造を担当したのは、駕洛国の金属加工技術の秘儀を継承する金属鍛冶・長光氏である。長光氏の氏神である、採銅所村(旧杉坂村)古宮八幡神社は、昔、豊比売命を祀る香春三岳の「阿蘇熊」と言う所にあつたと伝えられており、長光の集落名

が採銅所の南南東1kmの所に現存する。「阿蘇熊」の「阿蘇」は、龍城国の、火を噴く龍の如き、「阿蘇山」で、「熊」は、「子供のスッポン(銅亀=首露王)」を抽象しているように筆者には思える。長光の「長」の語源は、前述した首露王の後、黄玉王妃こと「駕洛国息長大姫大目命」がトーテムとした龍(なが=長)をそのまま受け継いだものと考えて問題はないであろう。

次に、「光」について調べてみた。韓音で光を意味する単語を選び出してみると、以下の通り様々な意味があることが分かる。Bichinada で輝く、bichi は、光、光線、栄光、つや等、meolda で遠い、keuda で大きい、neorbdá は広い、kwangseon は光線、wideok で威徳、eunhyo reur beoipurm で恩恵を施すこと、eunchong は恩寵、yeotaek は余沢、kyeongchi で景致、景色、風景等、大自然の美しい姿を表現し、munmul wi mi で文物の美、munkwa で文化、beonyeong で繁栄、yeongkwanb で栄冠など様々な意味があることが分かる。このうち、長光の「光」の意味として、美、栄光、威徳、恩寵、繁回復や繁栄する様にとの願いと祈りとこれまでの恩寵に対する感謝を込めた命名と思われる。また、「龍光」を漢和辞典で引いてみると、①君子の徳の形容及び②龍泉という古代の名刀の光、転じて、名刀の光のこと書いてあり、「龍光」は、古代の刀鍛冶の名跡である。龍(naga)に長を当てれば、「長光」となる。なお、龍王は、仏典に記されたインドの蛇形の精霊で、ナーガを龍と漢訳されて中国に伝わり、仏法の守護神とされ、許黄玉妃の出身地、インドでは多くの民の信仰対象となっている。

1 11 光を用いた地名の例

香春岳から北方20kmに位置する北九州市八幡東区に「枝光」の地名がある。地域に伝わる古文書に「村の名義は神功皇后征韓の時、此の所に御船を留め給ひ、幸神を祭り玉ひし折しも、櫛の枝に神宝を掛け玉ひし故、鏡などの枝に光かれるを以て、枝光と称すと云ふ。」との記述がある。枝は、韓音では、yuksoni、yukkarak と読む。Yuk は数字の6、soni も karak も手指の意味である。漢和辞

典では「六指の人」となっている。ところが、karak は駕洛と同音異字で、yuk-karak は六駕洛と漢字で書け、これは六伽耶(加羅)のことである。従って、「枝光」は単に、枝が光るという単純な意味ではなく、六駕洛=六伽耶(加羅)の繁栄を祈る意味であることが分かり、長光と同じ手法の命名の事例であることが分かる。また、「幸神を祭り玉ひし」の「幸神」の表現については、前報を参照のこと[0]

北九州地区に於ける黄玉王妃に関係すると思われる地名の第二の例として、折尾、黒崎(いずれも JR の駅名)及び皇后崎が挙げられる。皇后崎は、日本書紀が出典で、仲哀天皇条に記述があるように、洞海湾岸に位置しており、神功皇后の説話に基づいた命名である[13]。洞海湾に船で進入した神功皇后が引き潮で船が動けなくなり、時が至って満ち潮になって、脱出できた故事によっている。崎(saki)は、岬の意味に解釈されているが、韓音の saki は、「事機」と書け、「潮時」の意味である。黒崎は、黒を heuk と読んで、黍(きび)のことであり、韓音では kijan で気長と書ける。気長は日音では「おきなが」と読み、神功皇后の娘時代の名前「気長足姫」を表現していると解釈して矛盾はない。

折尾は、八幡西区にある JR の駅名であるが、その意味は意味不明である。北九州地区に関する記述で、「折」が使用されている最も古い文献は日本書紀であり、景行天皇条に「土折猪折、隠住緑野河上」である[14]

折尾の「折」は、韓音で「jeol」で、「絶」と同音異字であり、尾は bi 又は mi と読めることから、折尾は、絶美(jeolbi)と書け、「絶美」は「絶世の美人」のことであることがわかる。神功皇后(気長足姫)が絶世の美女であったことを伝えている。

1 12 「今、鹿春の郷というは、よこ訛れるなり。」

T3 行のフレーズの「この河の瀬、清し。因りて清河原の村となづけき。今、鹿春の郷というは、よこ訛れるなり。」の意味が良く理解できなかった。「清河

原の村」を「鹿春の郷」と言うのはどこが「よこ訛れている」のであろうか？その理由を以下の様に推理した。「清河原」に於いて、「清」をシミズ（清水）の「シ」と読み、「河」をカワの「カ」と読めば「清河」は、「シカ」と読めるので、「鹿」を当てたものと思われ、この読み方が「よこ訛ている」即ち「誤って伝えられており、事実ではない」として、前述した(T4')行で、「昔(氏)の者、新羅国神(王)なり、子道として親孝行するため自ら渡り帰り来たる。原(元々)此に住む、黄氏の血筋なり。黄氏は即位を便(司)どる、名付けて曰く、鹿春の神と。」述べている。

鹿には、「誰でもほしがる中原の鹿」即ち、この鹿は、帝位を示す漢字である。逐鹿で、帝位を争うことである。この逸文の作者は、香春の香に鹿の字を用いることの歴史的事実を明確に述べている。

1 13 百済の武寧王、各羅島誕生説

日本書紀に百済の武寧王が、各羅(kakara)島で誕生した逸話が掲載されている[15]、ところがこの各羅を鎌倉末期、文永1(1264)年または建治1(1275)年に完成した、日本書紀の注釈書(二八巻、卜部懷賢著)である釈日本紀は、「カ禾ラ」と読みを付けており、明らかに kawara と読んでいる[17]、しかし、岩波の日本書紀の注では、各羅にカクラと読み仮名をつけたが『ク』を『ワ』と書き間違えたものであるとして、kawara と読むのを間違いと切り捨てている[16]。

逸文で、河原を kawara と読むのは容易であるが、春は haru であるから、鹿春を kawara と読むのは少々困難である。逸文では、鹿が「帝位」の意味であることを理解した上で、「即位を便(司)る『鹿春の神』と名付けた」と述べている。それでは、「鹿春=鹿wara」のwara とは何であろうか？鹿は帝位の意味であるから、wara を鹿(帝位)に着けるという意味である。記紀には、wara という用語は使用されていない。豊日別宮古文書に「和羅」が初めて使用されている。この古文書では、伊良和羅と用いており、「伊良」と「移讓」は韓音で

同音異字、移譲和羅と書けば、「和羅に皇位を移譲する」の意味となり、和羅の帝(鹿)が誕生した意味になる。鹿春(香春)も豊日別宮も同じ豊前国内にあり、宇佐放生会を共催している。豊前風土記逸文の鹿春は、鹿和羅の和羅を隠す意図があったと筆者は感じている。乙巳の事件(645年)で、入鹿の暗殺に関与した中臣鎌子は、豊日別宮の関係者であったと考えられることから、鹿春を鹿和羅(kawara)と呼ぶようになったのは、この年(645年)以後と考えられる。では、645年以前に於いて、この香春の地域は何と呼称されていたのであろうか? 逸文によれば、新羅の国王の昔脱解が、親孝行のため香春に里帰りをしたという興味深い事実が述べられている。脱解は、嘗て任那と言われた加羅の地で、新羅の国王となっていることから、逸文の「鹿」を用いた表現を借りれば、加羅で「鹿=国王」になったので、鹿加羅と表現できる。和羅に皇位を移譲した蘇我入鹿も小伽耶(sogaya=蘇我家)が本貴であるから、鹿加羅と表現しても矛盾はない。

鹿加羅は、kakara と読み、各羅と同音異字である。釈日本紀(13世紀編纂)は、武寧王が誕生した、各羅(kakara、kakura)を kawara と読んでいる[17]。武寧王は、百済の王(加羅の王)となったので鹿加羅である。

斯麻王(後の百済の武寧王)が、筑紫の各羅嶋で誕生した461年頃、各羅は、書紀に書かれているように、漢字の読みから間違いなく、kakara 或いは kakura と読まれていたと思われる[16]。また、Kakura は、福岡県田川郡香春と境界を接する企救郡小倉の古名と同音でもある[15]。また、各羅は、645年以前の皇位は、加羅(任那)の出身者が即位していたので、鹿を用いて表現すれば鹿加羅で表現できるので、kakara と読まれていたと考えることもできる。逸文によれば、鹿春の地には、キングメーカーである黄家が存在した。

百済の武寧王(25代:在位502-523)の即位は、502年で42歳の時である。また、日本書紀に武寧王の淳陀王子が514年に逝去したと記録されている[18]が、武寧王が筑紫の各羅で誕生した後、百済王として即位する502年まで、百済に帰国した記録が書紀には書かれてないこと。また、514年に逝去した淳陀

皇子は、百済から来日した記録もないので、武寧王が倭国滞在中に誕生した可能性が大きい。以上の推理から、倭国の各羅で生まれた斯麻は、その地で帝王学を学び、成長して百済の25代武寧王となったということになる。この場合、各羅が絶海の孤島であれば、百済の王を育てる帝王学の教育は、不可能となるので、筑紫の各羅嶋の「嶋」は領地、領域の意味もあり、必ずしも、絶海の小さな孤島と限定する必要はない。海は、人海戦術、学海など人や物が多く集まる所をも表現する漢字で、古事記では、筑紫（竹斯）国を筑紫島と表現している例もある〔19〕。羅には加羅と和羅が存在するので両者を表現するために各羅という漢字を選んだのであろう。各は、「それぞれ」という意味である。

書紀に記述されている、百済の武寧王が誕生した「各羅」を特定するために、これまでの研究結果を整理すると、①各羅は筑紫国の人口密集地、②各羅をカクラ及びカカラと呼称すること、③釈日本紀にある、カワラとも呼称される地域であること、④その地域には、実績のある有力な権力者（キングメーカー）が存在し、帝王教育や国際語（漢語、新羅語、百済語、倭語）の教育が可能なこと、⑤航海術に優れ、金属精錬等ハイテク技術集団が存在したこと、以上の少なくとも五つの条件を満たすものでなければならないことが分かる。これらの条件から判断すると、武寧王の誕生地として、話題になった現在の佐賀県唐津市鎮西町加唐島は、呼称の音、カカラ（加唐）だけは、確かに一致するが、筑紫国ではなく、当時、火（肥）国の領域と考えられ、絶海の孤島でありその他の条件が満たされない。従って、武寧王が生誕した各羅は、筑紫国の鹿春が最も有力という結論になる。項17で検討したように、「便即」の訳文として、韓音由来の「即位が巧だ」は未だしも、「即位を仕分けする」は、当初、今一度ピンと来ない訳文であると感じていたが、「かわら」のキングメーカーが、新羅王の「昔脱解」や百済王の「武寧王」及び和羅の「中大兄皇子（天智天皇）」の即位に関与しているので、国際的な王の即位に関与したということであり、「国際的な即位の仕分け」を行っていたことを歴史的事実として表現する用語の選択が行われていることが証明されている。

筆者は、鹿春の読みについて色々検討してきたが、逸文の著者が何を考えてこの二文字を使用したかを考えるに、このまま単純に、kaharu(かわる)即ち、「皇位が代わる」と読める人材の出現を待ち続けていたのかもしれないと思うに至った。

1 14 有銅并黄楊

(S6)に「第二峯有銅并黄楊龍骨等」の記述がある。通常では、「銅と黄楊、龍骨が第二峰に有る」ということであるが、第二峰に銅神を祀っていたということであろう。駕洛国では、首露王の誕生神話に亀が登場するので、神=亀である(図5)。従って銅神は銅亀と書くので、駕洛国の金海にある首露王が降臨した山を亀旨峰 kujibong と呼んでいる。地域の人達は、亀旨峰を kujibong と呼ばずに、チャラポン jarapong と呼んでいる。

駕洛国は、金官伽耶ともよび金属の精錬など高度な金属技術文化があったの

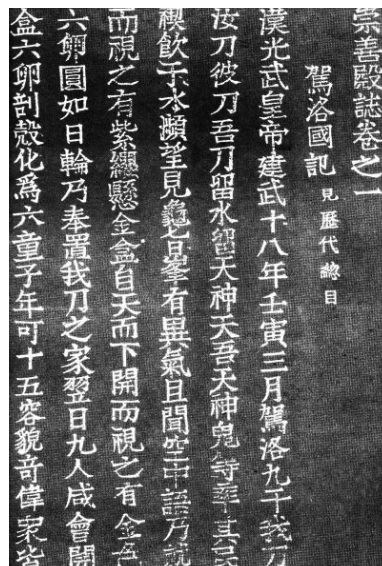


図5、駕洛国記・首露王降誕記述の部分

で、銅神と呼ばれた首露王が降誕した山を銅亀峰と呼んだのである。

銅亀 jara とは、スッポンのことである。一方、jarada と動詞で用いれば、足りる、充足するの意味になる。首露王 = 銅神 = 銅亀 = jara = スッポン = jarada = 足 = tarasi = 帯が成立する。と言うことは、「銅井黄楊」とは、「首露王と黄王妃が共におられる。」の意味になる。

1 15 豊前國風土記(逸文)の記述を裏付ける証拠

北九州市小倉南・北区を貫流する「紫川」について、最も古い記述が日本書紀、景行紀に現れている。少し長くなるが以下に引用する[4]

景行天皇が周芳の婆娑に着いた時の話として、神夏磯媛という女酋がまかり出て天皇に申し上げた内容が以下のように書いてある。

「(1)願無下兵。(2)我之屬類、(3)必不有違者。(4)今將歸德矣。(5)唯有殘賊者。(6)一曰鼻垂。(7)妄假名號、(8)山谷響聚、(9)屯結於菟狹川上。(10)二曰耳垂。(11)殘賊貪婪、(12)屢略人民。(13)是居於御木(木此云開)川上。(14)三曰麻剥。(15)潛聚徒党、(16)居於高羽川上。(17)四曰土折猪折。(18)隱住於緑野川上、(19)獨特山川之險、(20)以多掠人民。(21)是四人也、(22)其所拠並要害之地。(23)故各領眷屬、(24)為一処之長也。(25)皆曰、不從皇命。」(ただし、括弧内の数字は筆者による。)

ここに記述されている内容は、景行天皇の命令に従わない4人、「鼻垂れ」、「耳垂れ」、「麻剥」、「土折猪折」という賊であり、その住みかは「宇佐の川上」、「御木の川上」、「高羽(遠賀川)の川上」、「緑野(紫川)の川上」である。歴史的な事実に従えば、これらは、いずれも豊前国に属し、秦氏の支配地域であった。宇佐には宇佐神宮がある。また、宇佐神宮の本宮と考えられる豊日別官幣神社の開祖については、同神社の古文書に「欽明二年(五四一年)大歳、辛酉、豊国阿賀波多村、神官最祖、大伴連・神牟根奈里」と記述がある。豊日別宮の神官は、代々、神(こう)家が継承している。豊前國風土記(逸文)に書かれている「かわら」は、上記の「高羽(遠賀川)の川上」の地域が該当する。

また、上述した田川郡“かわら”と企救郡小倉が接する境界付近は、(17)と(18)に「土折猪折、隠住於緑野川上」と記述している。「土折猪折」が、「緑野の川上に隠れ住む」の「緑野(みどりの)」は、韓音で「rokyā」もしくは「no-kyā」と読んで「鹿野」と同音異字である。「鹿野」は、kaya(伽耶)とも読める。景行記のこの部分は、原文の文字を発音や漢字の字形を少し意図的に代えて、豊前国の指導者の悪口雑言、あらゆる悪黒を徹底して投げつけている。書紀の記述方法の検討から、書紀の編纂に当たっては、先ず、地方からあがって来た、風土記等の他、報告書の類があったことを伺わせる。この報告書等を材料にして、編者達は書紀を作ったのではないか。上で取り上げた「土折猪折」等はその典型である。地方からのありのままの状況報告を「景行天皇の威信」を高め、「悪者や卑しい者を平定した話」にすり替えるため、全体の文章は活かしつつ、同音の「悪意や卑下」を表す漢字、例えば、「始祖の足(たらし)族」を「鼻垂(鼻たらし)」に、差(おぐな)を「猪や土(つまらないもの)」に、棕(おぐら、こくら)を掠(かすめる)に、そして、穂(おだやか)を隠(かくれる)に置き換えたり、文字の位置を入れ換えたりした意図的な操作が疑われる[21]

従って、上記の「鹿野」とは、中インドの波羅奈国の城北にあった園、鹿野苑(梵語 Mrgadava)で、今のベナレス市の北サルナートにある。釈尊成道後、初めて法を説き、憍陳如ら五比丘を済度した所で、鹿苑、施鹿林、牡鹿の苑、とも言われたと場所のことで、紫川の上流、金辺峠を挟んだ“かわら”地域にかけて、仏教文化の聖地が存在したことを示唆している。この金辺峠から14km 下流の小倉南区下徳力遺跡で我が国最古、3世紀後半の銅の精錬滓が発掘されている。日本書紀の新しい解釈によって、「緑野の川」が流れる地域は「小倉」であり、そこを流れる川は「おぐら川」であり、「差川」である。これは、「chakawa」と読み、「cha」に「紫」の漢字を当てている。「紫」は「ja」又は「cha」と読める。

一方、首露王妃の許黄玉は、阿踰陀国(インドのサータヴァーハナ朝: Satava-

hanas or Andras, BC 3C-AD 3C) の王女と名乗っている。阿踰陀国は、現在、北部インド Faizabad 州に位置し、六千年の歴史を誇る、古都 Ayudhya (アユダヤ) と考えられている。アユダヤには、Gogra river (ゴグラ川) が流れている。ゴグラ川は、チベットに源を発し、ヒマラヤを貫流しネパールでは Kanali river と呼ばれ、ガンジス川に合流する全長約1000km の流れである。ゴグラ川を清音化するとコクラ川になり、小倉(こくら)の地名との関係を更に解明するヒントが与えられた。

遠賀川の支流英彦山川には田川郡香春町に採銅所の地名が残り、奈良の大仏の鑄造原料の銅の採掘や宇佐神宮の銅鏡を鑄造した「長光氏」が居住した。香春町と隣接し「緑野の川」が流れる「小倉」は「足立山」などの地名から「足族」の領地であったことが推測される。

1 16 豊日別古文書の記述

豊国の旧名、豊日別の名を冠する古文書が香春についてどのように記述しているか確認してみる[20]。養老四年(720)放生会のために採銅所の長光の所にて宝鏡を拝受するために訪問しており、B76~B77に以下の記述があるが、採銅所・長光と書いてあり、香春の地名は出現しない。「長光、金銅以って宝鏡鑄ツクリ奉タテマルツル事終テ、宝鏡、三殿を神輿ミコシに乗り奉、豊日別太神草場宮に宝鏡御入り神殿に納ム。」

三殿とは辛国息長大姫大目神社、忍骨神社並びに豊比咩神社であり、これらは現在、香春神社となっている。即ち、採銅所・長光が鑄造した金銅製の宝鏡を沙伊和井宮司が拝受し神輿に乗せて、上記の三殿を拝殿した後、豊日別宮に運び、その神殿に移している。

また、B19~B20に以下の記述がある。

(B19) 連々流サザナミ長源ミナモトに達し、神、万歳山此処二遊ブカナ。
亦東西に当たり山あり玉芙蓉の如く、神の行く処

(B20) 金銀、黄璣コウヨウ、琉璃ルリ、璫メノウ、璣(玉)、琚(佩玉オ

ビギョク) 瑚璉(コレン: 供エル器) 瑜(ユ: 美しい玉の名前) 珠玉、玻璃ガラス、圭璧(祭礼に用いる飾り玉) 玳瑁(加工してない玉石の環) 璠璵(パンヨ: 魯の国の宝玉) 瑤(ヨウ: 美しい玉の名前) 等の宝貨(タカラ)は、凡オヨソ五色彩を呈す也。太神の神宝山是也。

B19は、B18から続いて、表向きは、川の流れとその源である美しい山々の描写である。B19に引き続き B20、一転、金銀を始め、玉(ぎょく、ok)に関する記述が始まっている。金銀に続いて黄葉(原文は王遍の葉)と書いてあるので、当初、山の記述でもあるので、紅葉の意味に読み下したが、王遍の葉は、辞書にはないので、研究した結果、黄に王遍がついた璠がヒットし、これは韓音で hwang、日音でコウと読み、何れも、瑞玉や佩玉の一種の意味で、玉のことであり、B20の主題に合致するので、これを採用した。そのため黄璠に璠葉の意味を含めるよう提案する。漢文では、「連々流長源達神万歳山遊此矣、亦當東西有山如玉芙蓉、神行处金銀黄璠琉璃璣琬瑚璉瑜珠玉玻璃圭璧玳瑁璠璵瑤宝貨九呈彩五色也太神之神宝山之也」となっており、「金銀黄璠」を「金銀璠璵」とも表記する事にする。

「金銀黄璠」に於いて、通常文では、貴金属の金と銀の意味であるが、金は勿論、駕洛国の王、金首露の金であり、銀は、韓音で銀魚(uneo)と書いて鮎のことである。また、「銀黄」と書いて、銀印と金印の意味であり、金印とは、金首露(駕洛国)の血統、銀印とは黄玉王妃(阿踰陀国)の血統と理解できる。「黄璠」は、日音で「オウヨウ」と読み、黄楊(ツゲ)と同音異字である。B20は、全編、玉が主題であり、「銀黄=銀印と金印」、「黄璠=おうよう=黄楊=hwangyang=黄嬢=黄・母様」、「銀魚=鮎=阿踰陀国(アユダコク)」、これらを総合すると黄玉王妃のことを述べていることになる。また、B19にある「玉芙蓉」の表現は難解だ。現存する「玉芙蓉」は、栽培種であり、古代には存在しなかったので、黄玉妃が仏教の聖地、阿踰陀国から渡来していることを考慮して、芙蓉には、蓮の花の意味を採用する。美人を形容する言葉でもあり、「玉」は当然「黄玉妃」のそれである。従って「黄玉妃は美人」の意味になる。

加えて、B19の文頭にある「連々流長源達」は、「連々と流れること長く、源に達す。」と読み下せるが、「連々と流れ、長の源に達す。」とも読め、「長の源」とは長（なが = naga = 龍 = 龍城国）の聖地に届くの意味になる。龍城国とは龍嬢国の意味もあり、黄玉王妃の故郷、阿踰陀国のことである。

B58に宝鏡を豊日別宮（沙伊和井宮）に運び、その神殿でのお祓いについて「官幣神殿東向者八字守護之見理也、御神跡南向者八神道正理也」との記述があるが、これまで、「御神跡南向者八神道正理也」の意味が全く理解できなかったが、B19とB20の記述が解明できたので、「南向き」の祓いの意味が奇跡的に理解することが可能となった。即ち、南向きとは、許黄玉王妃の渡来した方角、阿踰陀国 = 龍城国ということになる。古文書では、(B11)に、沙伊和井宮を「幸宮」と記述しており、「幸 = 黄 = こう = 神」を意味している可能性が濃厚である。

ということは、豊日別宮（沙伊和井宮）が宇佐宮の守護を行っており、かつ、沙伊和井宮での御神跡（宝鏡）の南（阿踰陀国）向の御祓いは、神道の正理に基づくもので、当宮のみが行えるものであるとの自負が感じられる。

従って、宝鏡の鑄造は、阿踰陀国 = 龍城国の正当な後継者・長光抜きでは実施できないことが表明されている。また、黄玉王妃は、自ら印度・阿踰陀国の公主（王女）と名乗っており、遠洋航海術に長けた民族のグループに属していたと考えられるので、「南向き」は、東南アジア全域で、遠洋航海の目印として利用されていた「南十字星」を信仰する宗教的背景があるのかもしれない。北半球に於いては、北極星と北斗七星を神格化した妙見菩薩を信仰する信仰を妙見信仰と呼んでいる。勿論、南十字星は、日本を含めて、極東地域では、沖縄や小笠原諸島、本州では串本町付近を除いて見ることは不可能である。しかし、南十字星は、現在でも、南半球の国々や地域では、そのアイデンティティのシンボルとなって、国旗などに利用されている。

南十字星とは、南十字座のうち、白色の1等星が2個、2等星1個、3等星1個が菱形に並んだ主要部分で、南半球では最も目立つ星座である。天測航海

の際に、南半球に入って北極星が見られない場合の目印となった。

ブリタニカ国際大百科事典によると、天測航法とは、航海の際に天体の位置を観測して船の位置を決定する航法である。電波等による誘導技術がない古代においては、遠洋航海には欠かせない技術であった。

この項まとめ

香春の名前の由来の一つが、豊前國風土記(逸文)に記述されている事実は、古くから知られており、香春の古名が鹿春であることは周知の事実であった。豊前國風土記(逸文)の原漢文は、一通り和文に読み下されているが、不可解な点が幾つか散見され、これまで、公表されてきた読み下し分で、別の解釈が可能と思われる点については、新たな読み下し文を提出した。逸文は、126文字の漢文で、88文字が河川を、後半の38文字が山岳のことを記述している。第一峯に祀られていた、辛国息長大姫大目命の名前などの研究から、辛国 = 駕洛国、息長大姫 = 息長帯姫 = 神功皇后の娘時代の名前 = 美人、大目命 = インド出身の形質、年魚 = 鮎 = 阿踰陀国、鹿春郷の河 = 金辺河、金辺 = kimhe = 金海 = 駕洛国の聖地、「し：清水」 + 「か：河原」 = しか = 鹿、昔氏 = 慶州昔氏 = 新羅國王、自度 = jado = 子道 = 親孝行、便即 = 即位を治める、ツゲ = 黄楊 = 黄嬢 = 許黄嬢 = 許黄宝 = 首露王妃、眞漏 = shillo = 首露、龍骨 = 船のキール = 遠洋航海民族 = 龍城国 = 龍嬢国 = 許黄宝の故郷、河原 = 源流 = 上流、河 = 黄河 = 許黄宝の血統、龍 = naga = 長 = 長光 = 龍光 = 古代の名刀の光 = 刀鍛冶の名跡などが解明された。逸文には、首露王のことよりも后である許黄玉のことが中心に記述されていることは、特筆すべきことであり、これによると、黄玉妃と首露王は、共に鹿春生れである。

結論として、当地は、古来より、自国のみならず国際的に、帝王を選出して即位できる権限を有していた模様で、武寧王が生誕した462年頃は、任那加羅出身者が皇位に即位していたので、日本書紀に書かれているように、鹿加羅と

表記できるので、各羅と書いてカカラと読まれていたと思われるが、入鹿が暗殺された乙巳の変(645年)で、和羅の中大兄皇子へ皇位を移譲した後は、和羅に皇位(鹿)を移譲したので鹿和羅(和羅の帝)と漢字表記され、各羅を“かわら”と読むようになったものとの結論に達した。因みに、逸文に書かれている当地出身の昔氏初代の脱解は、第4代新羅国王となり、武寧王も当地で誕生して、第25代百済国王となったことは、歴史的事実として確認できる。

尚、各羅(カクラ)は、「太宰管内志」に「可苦刺(カクラ)は今の小倉なり」と書かれており、小倉の古名で、香春(鹿春)と境界を接しており、奈良や京都から見れば同じ地域と認識されていたものと思われる。鹿春の読みは「かはる」であるから、普通に、帝が「代わる」と読めば、解り易い。

参考文献

- [0] 橋本昭雄、豊日別宮古文書と古代豊国のキングメーカーの研究、九州国際大学教養研究、第23巻、第3号、pp39 63 (2017)。
- [1] 李鍾璋、駕洛国の栄光②許王后、海より来る、p72、社団法人・駕洛中央宗親会 発行所、財団法人洛國史蹟開発研究院 (1987)。
- [2] 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋、岩波書店、日本書紀(下)、武烈天皇条、p16 (1994)。
- [3] 校注・訳者萩原浅男、鴻巣隼雄、小学館、古事記・上代歌謡、pp86 89 (1973)。
- [4] 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋、日本書紀(上)第8段1書第二、岩波書店、p124 (1994)。
- [5] 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋、日本書紀(上)第8段1書第三、岩波書店、p126 (1994)。
- [6] 長野覺、朴成壽編、韓国・檀君神話と英彦山開山伝承の謎(添田町主催、日韓国際古代史シンポジウム)、pp153 160 (1996)。
- [7] 佐伯有清編訳、三国史記和人伝他六篇 - 朝鮮正史日本伝1 - 、岩波書店、p33 (1988)。
- [8] 佐伯有清編訳、訳注『三国遺事』和人伝他六篇 - 朝鮮正史日本伝1 - 、岩波書店、p73 (1988)。
- [9] 橋本昭雄、古代豊国のキングメーカー、西日本文化、402、pp22 27 (2004)。

- [10] 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋、日本書紀(上)補注7 - 八、岩波書店、p595 (1994)。
- [11] 李鍾璋、駕洛国の栄光③その栄光の消失と復権、p21、社団法人・駕洛中央宗親会、発行所、財団法人、洛國史蹟開発研究院、(1987)。
- [12] 金首露王夫人の「インド渡来説」科学的な証拠、中央日報、2004 .08 .19。
- [13] 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野 晋、日本書紀(上)仲哀天皇条、岩波書店、p324 325 (1994)。
- [14] 坂本太郎、井上光貞、家永三郎、大野 晋(校注)、日本書紀(上)、岩波書店、p282 289 (1994)。
- [15] 橋本昭雄、検証・百済の武寧王、加唐島生誕説、西日本文化、393、pp23 31 (2003)。
- [16] 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野 晋、岩波書店、日本書紀(下) 補注16 - 八 - 27、p582 (1994)。
- [17] 黒坂勝美、釈日本紀、国史大系第八巻、吉川弘文館、p248 (1965)。
- [18] 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋、日本書紀(下) 継体天皇条、岩波書店、p28 (1994)。
- [19] 萩原浅男、鴻巣隼雄校注・訳、日本古典文学全集、古事記、上代歌謡、小学館、p55 (1973)。
- [20] 萩原浅男、鴻巣隼雄校注・訳、日本古典文学全集、古事記、上代歌謡、小学館、p57 (1973)。
- [21] 橋本昭雄、小倉のルーツ、紫川を愛する会、pp50 52 (1997)。

The Study on Ancient Manuscript of Toyohiwake shrine and the Kingmaker of Toyo no kuni country in Kyushu, Japan (2).

Akio Hashimoto

Abstract

This paper reports the investigation of the grounds of derivation of the name of K-awara (鹿春) appeared in a missing Buzen Fudoki (a missing writings of the culture and topography of Buzen Province) written in the sentence of Chinese Characters in order to confirm the contents described in the Ancient Manuscript of Toyohiwake shrine, i.e. 昔者新羅國神自度到來住此河原便即名曰鹿春神 means that the 4th King Seki of Silla came back home by himself to see his parents as a son who belongs to a native Yellow Family having the power to renew the Imperial Throne, thus the family is called as the kingmaker of Ka Wara. Because the Deer used in Deer Spring (鹿春 : Ka Wara) means the Imperial Throne of Wara, 便即 means to take charge of the accession to the throne of Wara. On the other hand, Iyang Wara (移讓和羅) appeared in the Ancient Manuscript of Toyohiwake shrine, that is, to transfer the Imperial Throne to Wara from Emperor Soga Iruka to Prince Nakano ooe (Emperor Tenji) in 645. Therefore 便即 is the same meaning as Iyang Wara. And also 各羅 (Kakura, Kawara), the birth place of Munyeon wang (武寧王) of the 25th King of Pekche written in Chronicles of Japan (Nippon Shoki) is discussed.